

●研究の目的(背景、範囲)

本研究の目的は二つある。(1)オーラル・ヒストリーの手法を用いて、フルクサスに関わったアーティストに聞き取り調査を行ない、「フルクサス」についての基礎資料をつくることを目的とする。フルクサスについてはこれまでも欧米を中心として多くの資料が出ているが、活動の実態は十分に捉えられているとはいえない。フルクサスの活動のなかには、その場かぎりで終わってしまい、作品として記録されないものも多い。いわば資料化を拒んでいるともいえるフルクサスの活動の実態について、直接アーティストから話を聞き、資料としてアーカイブ化するとともに、英語に翻訳して世界に発信していきたい。インタビューの対象は日本人を中心とするものの、日本人に限定するのではなく、機会をとらえて可能性のあるアーティストから行なっていく予定である。(2)もうひとつの目的は、この基礎資料をもとに、フルクサスという運動において、「音」が果たした役割を考察、研究することである。フルクサスの運動にはしばしば音楽家関わっており、「音」はひじょうに重要な役割を果たしていた。このオーラル・ヒストリーのプロジェクトでも、「音」に関わることを含めてインタビューを行ないたい。そのうえでフルクサスの運動をサウンド・アートの先駆的な試みとして捉える可能性を探ってみたい。

すでにEric Andersen, 巖嘔, 塩見允枝子, Philip Corner各氏へのインタビューは完了した。今後インタビューを予定しているアーティストは, Yoshi Wadaなどである。インタビューは録音の書き起こしを行ない、インタビュー対象者の内容確認を経て、芸資研ホームページ上で公開する。日本語でのインタビューには英訳を、英語のインタビューには日本語訳をつけ、日英二カ国語で公開する。フルクサスについてこれまでにあまり知られてこなかった内容をネット上で公開し、広く知ってもらうことは重要である。特に、美術の運動として捉えられてきたフルクサスに、音楽出身のアーティストが大きく関わっていることを知ってもらう意義は大きいと思われる。

柿沼 敏江(音楽学部教授)